

『恐竜展』 大空をめざした恐竜

(2023・7・15～9・24 青森県立三沢航空科学館)



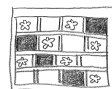
恐竜が好きである。なんとなく。恐竜が生きた長い時代や滅びの経緯もなんとなく好き。それから恐竜のフォルム。どの姿もなんとなく好き。特に草食系の大型恐竜ブラキオサウルスや日本で骨の化石が見つかったタンバティタニスが好きである。なんとなくがいくつも重なって、つまり「恐竜が好き」なのである。

今回観たのは、飛ぶことへ進化しようとした恐竜の展示だ。最近の研究によると次のようなことがわかっている。6600万年前の絶滅を生き延びた恐竜がいたこと。その恐竜が進化を経て現在の鳥類になったということだ。展示でクローズアップされていたのは、体に羽毛が生えているものや前脚が翼に変化しつつあるものだった。ミクロラプトルは、翼のようなものの途中にしっかりとかぎ爪が付いていた。「進化の途中なので、飛ぶというよりは滑空に近かったのでは」と、そばにいた解説員が教えてくれた。

1億7000万年をかけて鳥となった恐竜がいた。とてつもなく鳥がいとおしくなった。
(佐々木佳子)

吉井勇 『髑髏尼』

(2023年3月5日 歌舞伎座第三部)



歌舞伎の講座を持っていた女子大もなくなり、さらに新型コロナウイルスの蔓延による公演中止が続くなか、劇場通いからすっかり遠のいてしまった。売れ行きの芳しくなかったという團十郎襲名も行かずじまい。そんな隠遁生活？を見かねたわけでもないだろうが、知人が久々の歌舞伎座へと招待してくれた。これはありがたかった。

というのも吉井勇の戯曲が上演されると聞いていたので、チャンスがあればと思っていたからだ。見終えたところで「オペラ座の怪人」を思い出すなあ」と言うと、彼女も「(ノートルダム)のあれみたいですね」と返してきたので、どんな話かはお分かりだと思ふ。吉井勇といえは若き日の情熱的な恋の歌で知られているけれども、一方で『鵜石』『悪の華』など芝居の歌ばかりを集めた歌集を出しているほどの芝居好きだった。そんな彼が芝居を書こうとしたのはごく自然ななりゆきだった。前回の上演は昭和三七年(初演は大正六年)で、そのとき子役に出ていた坂東玉三郎が今回はヒロインの尼を演じていた。
(津金規雄)